

九三九番に入集)「かきくもれしぐるとなれば神無月ころそらなる人

(一二六一〈家集56〉)

やとまると」があるので、二首のうちいずれかは定かではないが。月次の絵巻に撰ばれたのは、正月(敏行)・二月(清少納言。齊信卿。梅壺

17 撰者五人Ⅱ源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅経Ⅱの共撰

に参ずの所。但し歌無し)・三月(天曆藤壺の御製)・四月(実方朝臣)・

忘れても人にかたるなうた、ねのゆめ見てのちもなが、りし夜をらぬイ

五月(紫式部日記、暁の景色)・六月(業平朝臣。秋風吹き雁に告ぐ)・

(一一六一〈家集14〉)

七月(後冷泉院御製)・八月(道信朝臣、虫の声)・九月(和泉式部、

あふことはこれやかぎりのたびならん草のまくらも霜がれにけり

帥宮の町門)・十月(馬内侍、時雨)・十一月(宗貞少将、未通女の姿)・

(一二〇九〈家集8〉)

十二月(四条大納言、北山の景气)である。

13 「くろしお」VOL2 No2 (一九七六年十二月、鹿児島県立短期大学地域研

究所)

18 『日本紀略』長保二年十二月十五日条「今日。皇后宮定子於二前但馬守平生昌朝臣宅。有御産事。皇女驍子。」
同十六日条「己未。皇后崩給。年廿九。在位十一年。」

14 『私家集と新古今集』(明治書院)第六章「馬内侍集・大式三位集と新

19 天曆四、五年ころの出生としての推定である。

古今集」

15 定家単独撰(詞書省略 以下同)

ほと、ぎすこゑをばきけど花のえにまだふみなれぬ物をこそおもへ

(一〇四五〈家集82〉)

ほと、ぎすしのぶるものをかしは木のもりてもこゑのきこえけるかな

(一〇四六〈家集83〉)

こころのみそらに成つ、ほと、ぎすひとだのめなるねこそなかるれ

(一〇四七〈家集166〉)

16 定家・家隆共撰

ほの見えし月を恋しとかへるさの雲路の波にぬれてこしかな

「おとろへはて、」宇治院に隠棲するまでの間に、あるいは彰子中宮のもとに出仕することがあったか、また、前稿でその可能性について検討してみたように「東三条女房」として詮子女院のもとに出仕するようなことがあったであろうかについては、必ずしも分明ではない。また、当時の多くの女性の没年が定かでないように、馬内侍の没年もまた明らかではない。

五回にわたって、名のみ高く伝未詳の馬内侍の生涯について——歌人として育まれてきたであろう文芸的環境を中心にみながら——その歌人としての生き様について、先学の御研究によりつつ試論をこころみた次第である。しかし、「馬内侍」自体についてあまりにも分明でない点が多く、今後の研究によって正されるべき点が多い。さらに後考に俟ち、推論の誤りを正していきたいと思う。

(注)

- 1 『平安稀観撰集』 本文篇(古典文庫)による。歌の欠字部分の右の()内は、「拾遺抄」による補い。
- 2 『平安稀観撰集』 解説篇「如意宝集」四九ページ。
- 3 『中古日本文学の研究』 「拾遺抄及び拾遺集の成立に就いての考察」(三三二ページ)。片桐洋一氏は『拾遺抄』(大学堂書店)に於て堀部氏の説を認めておられる。久曾神昇氏は「長徳二年十二月ないし長保元年

十二月の間」、「恐らく長徳三年七月以前」(和歌文学大辞典)とみられる。

- 4 『日本紀略』 長保二年二月廿五日条。「癸酉。以女御從三位藤原朝臣彰子一為皇后。中宮」即任宮司一以元中宮職一為皇后宮職。」以後定子の呼称は「皇后宮」、彰子は中宮と呼称される。

- 5 角田文衛著『日本の後宮』の「餘録」所収の歴代主要官女表では「初め齋院女房。円融朝の末に内裏女房に転ず(『権記』長保元年七月二十一日条)。後、中宮定子の内侍を兼任せるものの如し(中宮内侍)…」とされる。

- 6 鹿児島県立短期大学紀要第二七号(一九七六年十二月)

- 7 拙稿「馬内侍 (三)」鹿児島県立短期大学人文学会論集「人文」第二号(一九七八年六月二十六日発行)にふれたので詳しくは省略する。

- 8 六首共に詠作年次不明。馬内侍の経歴からは、円融天皇とその皇后皇子の可能性も無いわけではない。

- 9 大式高遠集(桂宮本二ノ二三三)に「清涼殿御前の梅花の、いとをしろくちりしをりに云々」の調書が参考となる。

- 10 「婦が門 夫が門 行き過ぎかねてや 我が行かば 肱笠の肱笠の 雨もや降らなむ 郭公 雨やどり笠やどり 舍りてまからむ郭公」

- 11 千載和歌集(四〇一番)には「題しらず」として入集。第四句「木の葉に変わる」。他に続詞花集・後葉集にも採られている。

- 12 馬内侍の時雨を詠んだ歌は二首。この歌の他に家集十八番(後拾遺集

素晴しさが賞賛されている。さらに誤りという点からみれば、話中、遍昭の詠んだ「をみなへしおほかる野辺に」の歌は、遍昭の作ではなく小野美材の作（古今集二二九番）であることは言うまでもない。ただ遍昭には名にめでて折れるばかりぞをみなへしわれおちにきと人にかたるな

（古今集二二六）

秋の野になまめき立てるをみなへしあなかしがまし花も一時

（古今集一〇一六）

の著名な二首があるところから混同されたものであろうか。また、「花故に野をなつかしみ」云々は続古今和歌集一六〇番、山辺赤人の

春の野に葦つみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける

をふまえたものであろうが釈然としない。なお馬内侍の返歌「花ゆえも」

も、当然のことながら現存する馬内侍の歌の中には見出せない。

説話は史実や資料の点で問題は確かに多い。しかし、流麗な歌風で知られ、後撰集などにみられる小町との贈答などに洒脱な人柄をのぞかせる遍昭、その場の機微を得た応待で、優美な王朝的雰囲気をもし出す宮廷女房、こうした場面の構成にはいかにもふさわしい上東門院の後宮。こうしたイメージの重なりから、前の悦目抄にみるのと同様の意味合いをもってこの説話も構成されたものではなかったらうか。

我田引水の嫌いを恐れるが、馬内侍に関して、抽象的な言い方ではあるが、少なくとも優なる宮廷歌人としての、当代から伝えられた評価の程を

読みとることにおいて、これらの説話の語るところも、必ずしも妥当性を欠くとは思えないのである。

なお、評価にかかわることとして森本元子氏は、馬内侍集と新古今集について論じられた中に、馬内侍集の作で新古今集に入る歌八首（内七首が馬内侍作）のうち二項（一〇四五―一〇四六・一〇四七）が定家の単独撰¹⁵、一首（一二六一）が定家・家隆共撰¹⁶、二首（一一六一・一二〇九）が撰者五人の共撰¹⁷で、「定家の関与するものが五項あり、五撰者すべての撰んだものが二首あることは、馬内侍という女流歌人に対する評価乃至享受として興味ある事実といえよう」と記されていることを附記しておきたい。

四

残された問題として、馬内侍は定子の後宮に何時頃まで出仕したか、またその後はどうしたのか、などの問題がある。しかし、これらの問題を満足に解決するだけの資料は無い。ただその晩年には佛門に入った様子で

おとろへはて、うち院にすむに、かへる雁をきゝて

と、まらぬ心を見えむかへる雁花のさかりを人にかたるな

（家集二〇六番。後拾遺集七〇番）

の一首が見える。老い果てたその身を宇治院にゆだねたことを窺うのみである。

定子の崩御は、長保二年十二月十六日¹⁸、醍醐内親王出産による崩御であった。それは、馬内侍の五十才を少し過ぎたころのことと推定される¹⁹。

に、ほたるの多くすだくを見て、先に立ちける女房の「ゆ、しのほたるや、雪をあつめたらんやうにこそみゆれ」とてすぐるに、つぎなる人幽なる声にて「螢火乱飛」とうちながめたるに、又次の人「夏虫の」と花やかにひとりごちたりける。とりぐにやさしく、おもしろくて、此をとこ何といふ一ふしなからむがほいなくて、ねずなきをし出したければ、先なる女房「物おそろし、螢にも声は有りけるよ」とて、つやぐ騒ぎたるけしきもなくて、うちしめりたるそらおぼめきの程も余りに色ふかくなしくおぼえけるに、今ひとりの「鳴く虫よりもとこそ思ひしに」と取りなしたりける。是又思入たる程たへがたくおくゆかしき様也。すべて此人々とりぐにいとやさしくてぞ有りける。此心は「音もせでみさほにもゆる螢こそ鳴く虫よりもあはれなりけれ」といふ心也。此の五人の女房は、天曆の御時梨壺の五人の歌仙の中に清原元輔女、清少納言と言ふ者也。一人は其比源氏物語作れる紫式部並びに赤染衛門、伊勢大輔、馬内侍など聞ゆる人々也。いと取りぐに心有りて優なる人ども也。あたらしくよみ出たらむはさる事なれども、心ある様やさしくこそ侍れ。

(歌学大系四)

と。またこの他にも一条朝における馬内侍の歌人としての位置を語るものとして『撰集抄』広本はおもしろい話を伝えている。元来『撰集抄』が西行仮托の偽書であって、過誤が多く、種々問題を持つことは古くから指摘されている。ここにあげる話もまたその過誤の著しい一例であるが、説話として興味ある場面の構成ではある。全文をあげる。

遍昭僧正名歌事

昔遍昭僧正の、上東門院へ参給へりけるに、今夜は御所にさふらひ給ふへき由、馬内侍まで被仰けるに、遍昭さしてなすへき事侍とて罷出んと言を、中務、いかに御前の野への女郎花を見すこさせ給へきと、おかしきさまに聞えければ、遍昭、

女郎花おほかる野辺に宿りせはあやなくあたの名をや立へきと読て、すてにた、れるに、馬内侍取あへす

花ゆへもあたなる名をは流さしと聞は袂を引もと、めす

と読侍けり。遍昭の歌、内侍の歌、女院みすの内にて聞召て、たとへん方なく目出度がり給けるとそ。花故に野をなつかしみ、一夜ねてあたなる名をは我に残さしと言事は柿本也。然に野へに住居しなは、あやなくあたの名をたたん事の、胸いたく覚程の情なき心にしあらは我も引とめて、又あたなる名をは残さし物をと、返し侍るにこそ。

(続群書類従三十二下)

遍昭僧正はいうまでもなく六歌仙の一人。弘仁七年(816)に生まれ、寛平二年(890)七十五才で歿した。上東門院とは、一条院後の彰子(988-1074)であり、万寿三年院号を受けた。時代的にみて遍昭とは二〇〇年近い隔りがある。

馬内侍については、今まで見て来たように定子の女房であり、事実上では彰子に出仕したと言う確証はつかめていない。しかし、本説話は歴史的には全くありえない時代錯誤の上に立って、遍昭僧正と馬内侍の贈答歌の

の冒頭を飾るにふさわしい場面といえよう。

41 85 97 143 も折々につけて中宮の御意向に応えての詠作である。41 は、催馬楽「婦が門」¹⁰をふまえたもの。143 の時雨の歌は千載和歌集入集歌。¹¹『明

月記』天福元年三月二十日の条に記された月次絵巻の十二人の歌人の一人として、「十月」に選ばれたという「十月^{馬内侍時雨}」の該当歌ではなかったろうか。¹²定家のころの評価を示すものとして興味ぶかい。

ともあれ、詞書のそれぞれにみるところ、前述の中宮の「これに、ただいまおぼえんふるきことひとつづつ書け」と仰せになる場面（枕草子二三段）とか、庚申の夜の、題を出して女房にも歌を詠ませられた場面（同九段）などが思いあわせられる。

家集の簡単な詞書と歌のみからは、枕草子にみられるような場の雰囲気や華やかさはみられないが、馬内侍は年輩の中葛女房としてそれ相応に、定子後宮の文芸的好尚の中にとけこみ、歌を詠み、その立場を果たしているものと考ええる。

さて、歌人としての馬内侍に対する評価はいかなるものであったろうか。それについては「馬内侍（一）」¹³に勅撰、私撰集への入集状況と共に説話に表れたところを簡単に紹介したが、ここでもう一度和歌にまつわる説話についてやや詳しくとり上げてみたいと思う。それは、紫式部、清少納言、赤染衛門、和泉式部らと並び称されていることから、当代の評価ないしは語りつがれた女流歌人としての評価が相応に高いものであったと考えられるからである。章を改めて述べよう。

三

『十訓抄』第一、「可施人惠事」中の「一条天皇御時才女賢臣名僧輩出事」に次のようにある。

（略）此比は源氏物語作れる紫式部、赤染衛門、和泉式部、小式部内侍、小大君、伊勢大輔、出羽弁、小弁、馬内侍、高内侍、江侍従、新宰相、兵衛内侍、中将などいひて、やさしき女房どもあまたありけり。

（『新訂増補国史大系』第十八卷）

馬内侍も当代の才女として数えられているのである。また『八雲御抄』には、

女歌には赤染衛門、紫式部、和泉式部、相模上古にはぢぬ歌人なり。

其外も道綱母、馬内侍やうの歌人おほく侍しもみなうせ侍にし後は天下に歌人なきがごとし。

（『日本歌学大系』別卷三）

と記され、ここにおいても赤染衛門、紫式部、和泉式部らに次ぐ女流歌人としての評価を得ている。これに徴しても、また拾遺和歌集以下勅撰入集歌四〇首を数え、私撰集への入集、そして家集所収歌の技倆などからおしはかつてみても、『十訓抄』の伝えるいわゆる説話としての把握も誤りでは無いと言えよう。また、類する説話に『悦目抄』の一文がある。宮廷女房の当時の文芸的好尚をふまえて、教養を称賛したものである。

ある殿上人さ月廿日あまりの比、いとくらかりけるにや、やんごとなき後の宮にまゐりてめんだうにた、ずみけるに、上より人の音のあまたしければ、さりげなく引きかくれてのぞきけるに、御つぼのやり水

馬内侍の家集にも、定子の父中関白をはじめ道兼、道長、朝光、公任、実方、明順らの事がみえ、また名を秘した人々との贈答歌も多く、多彩な交遊の程もしのばれる。これらについてのあらましは拙稿「馬内侍私論―交遊を中心に―」に述べたので、個人的な交遊については省略するが、大斎院選子に出仕した時代からひきつづきこれらの人々との宮廷における交遊関係のあったこともまた想像にかたくないのである。

因みに、漸く円熟期を迎え、当代に並び存した選子斎院サロンと中宮方との交流も折にふれ雅交のあったことが知られるが、長徳五年一月二日の条（枕草子三卷本八七段）に見られる卯杖につけての選子斎院と定子中宮の贈答のくだりは、両サロンの雅交の程を示すものである。⁷

馬内侍がこうした定子の後宮に出仕した間における詠作――もし、「うへ」を一条帝、「宮」を定子と解しうるならば――と推定されるものに次の六首がある。本文は「三手文庫本馬内侍集」によった。番号は家集所収歌の通し番号である。

清涼殿の御つほねにうへわたらせたまひて梅のはなのすくなく
さきたるをけしめもみえしかしすくなければとおほせられしか
は

1 さかありてちらましいかにおしま、しこ、ろのとけき春のはなかな
おなしとしの三月に中宮の御かたに花をかめにさ、せたまひて
これかちる心よめとおほせられしかは

2 ちらしとやたのめそめけんはかなくもとまらぬ花にそふかな
五月宮の御まへに雨のいみしくふるにほと、きすのなきてわた
れは人に歌よませたまひしに

41 とふかたそまつしられけるほと、きすいかになくねそ雨やとりせて
五月のなか雨にあやめのおちたるを宮御覧してあはれ哥よめと
おほせられしかは

85 昌蒲草いつれのさはにねをとめて身をはなかくたしはつらん
正月に空のけしきなどもよしよめと宮の仰られしかは

97 浦ことにあまはみるらんはつ春のけぬるき風に浪やなこまむ

143 ねさめしてたれか聞らむ此比の木の葉にかゝるよはのしくれを
十月はかりおもへることよみてと宮よりおほせられしかは

1 番の歌は、多分定子の上局であった弘徽殿の御局でのことであろう。主上が清涼殿御前の梅花を御覧じての御ことばに応えた歌として、馬内侍にとつては光榮に満ちたものといえよう。続く2番は、同じ年の三月、中宮のもとに侍しての詠作。古今集一三三番「停むべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か 躬恒」による詠と思われ、梅から桜への時の推移を示すと共に帝、中宮のおそば近く侍しての作として、共に家集

伝」と記された高内侍貴子を母として生まれ、漢詩文に秀れた兄伊周らと共に育てられた定子は、美貌と共に明るくおらかな氣質を父から、聡明で才氣煥発な面を母から受け継ぎ、豊かな知的教養を身につけて成長した様子である。そうした定子中宮を中心とする後宮が、自ら枕草子にみられるごとき文芸的氣風を築いていたのも、けだし当然というべきであつたろう。

聡明で博識な中宮は、和漢の詩文についての知識をふまえての、才氣を發揮する清少納言ら側近の女房に御満悦を覚えられると共に、また古歌への造詣も深く、自ら歌を詠み、側近に詠ませ、機智的な古歌の世界の再現を愛で楽しまれる趣も多かった様子を窺うのであるが、清少納言が定子サロンに於て、そうした機智的反應を即座に成しうべく、正しく文芸的に育て上げられて行った具体的な様相については、目加田さくを博士がその著『枕草子論』の「後宮サロンと清原家門」第二項「皇后定子サロン」において詳述されているのが、まことに示唆に富む。氏にならつて例をとれば、降り積んだ雪を御覧じては、白詩をふまえ「少納言よ、香爐峰の雪いかならん」と仰せられ（三卷本二九九段 雪のいと高う降りたるを）、琵琶を立てて持ち手を休めていらっしゃる中宮を拝しての、清少納言の白詩「琵琶行」をふまえての「なかば隠したりけんは、えかくはあらざりけんかし。あれはただ人にこそありけめ」に対して「別れは知りたりや」と仰せられた（同九四段 上の御局の御簾の前にて）ことや、また同じく八月十よ日の月夜に琵琶の音に黙している清少納言に「など、こう音もせぬ、ものい

へ、さうざうしきに」と仰せられたのに対する「ただ秋の月の心を見侍るなり」の応えに「さもいひつべし」と仰せになったこと（同一〇〇段 職におはします頃、八月十よ日の月あかき夜）等々著名な段に代表される、中宮を中心とした詩文の世界への連想と再現。また、たとえ内容的にはとるにたらぬものであつたにしても、その劣りまさを論じた物語り批評の場（同八三段 かへる年の二月廿日よ日）。さらにはまた「清涼殿の丑寅のすみの」（同二三段）に見える「これに、ただいまおぼえんふるきことひとつづつ書け」「とくとく、ただ思ひまはさで、難波津もなにも、ふとおぼえんことを」と責め詠ませられたり、続く古今集に関するくだりと古歌を知らぬ女房たちを戒めての、宣耀殿の女御に関する歌語り。「五月の御精進のほど」にみられる、ほととぎすの声を聞きに出かけて歌を一首も詠んで来なかつた清少納言を戒め、中宮自ら積極的に詠ませようと働きかけ育まれた様子等々から、定子中宮は、年若いながら深い教養をもつて、自ら中心となつて後宮の文芸的雰囲気をつくり、或は女房たちを育まれたことを知らしめられるのである。が、こうした文芸的雰囲気の中で育てられたのは、ひとり清女のみではなかつたろう。「中宮内侍」―定子中宮付きの内侍―であるからには当然、時期を同じくして、いや、清少納言よりも早く出仕していた馬内侍に於てもまた、おそらくはこうした中宮の豊かな文芸的世界に浸り、参加し、大きな感化と影響を受けて充実したものとなつていったに相異ない。

定子の後宮に出入りした多くの公達の名は枕草子に様々語られている。

子」であると認められる。従って定子の立后に際して、本宮の掌侍となつたと解される。ただし、後宮女房と解するか、内裏女房であつて、定子の内侍を兼ねたと解するか、問題は残る。また『枕草子』の「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどのことなど」の段の、登花殿での中関白家親子の円居を記した終り近くに「宮のぼらせたまふべき御使にて、馬の内侍のすけまゐりたり」の一文がある。「典侍」である点と帝の御使として参上した内裏女房である点に疑問を抱きつつも、馬内侍と同一人ではないか、宮廷女房としての公的な立場での一端をのぞかせる場面と受けとれないか、などと私は考えてきた。しかし、正暦元年十月五日日本宮掌侍となり、『枕草子』のこの段、長徳元年二月現在までに典侍となつた裏付けがない限り、そう解することは無理であろう。同一人か否かについては慎重な態度をとらざるを得ない。因みに「馬内侍のすけ」についての諸注釈書の主な説を上げておきたい。

春曙抄（北村季吟古註釋集成）——左馬権頭時明の女。一条院源氏物語を御覧じて紫式部は日本紀をこそよく見たりけれとのたまひしを妬みて、日本紀の局といひし人なるべし。歌人也。

岩波文庫（池田亀鑑校訂）——左馬権頭時明の女、以下春曙抄に同じ。

朝日古典全書・前田家本枕冊子新註・枕冊子全注釈（田中重太郎注）——右馬権頭の藤原時明のむすめ。

岩波古典大系本（池田亀鑑・岸上慎二校注）——右馬権頭藤原時明女。

小学館古典文学全集（松尾聡・永井和子校注）——右馬権頭時明のむすめ

という。

新潮日本古典集成（萩谷朴校注）——伝未詳、中古三十六歌仙の一人で、初め齋院選子内親王に仕え、のち中宮定子に仕えて掌侍となり、中宮内侍とも呼ばれた左馬頭源時明女馬内侍とは別人であろう。天皇の使者としてきているのであるからには、内裏女房でなければならないからである。

以上の「時明女」とみる説のうち、春曙抄は「左衛門の内侍」との混同、また田中重太郎氏注及び古典大系注の「藤原時明」は、大和守藤原時明と源時明との混同で、源時明が正しい。

現資料での考察では、萩谷氏の説に従うべきであろうか。

二

定子後宮における文芸的雰囲気については、清少納言の目と立場を通してではあるが、『枕草子』によっていきいきと物語られ、そのあらましを察知しうることは周知の通りである。

「御容貌も心もいとなまめかしう御心ざまいとうるはしうおはす」

（『栄花物語』さまざまのよろこび）、「御心をきていとうるはしくあてにおはし」（『大鏡』道隆伝）と評される道隆を父に、当代の女性としては、才賢く「女なれど真名などいとはよく書きければ、内侍になさせ」（『栄花物語』さまざまのよろこび）、「それはまことしき文者にて、御前の作文には文奉られしはとよ。少々のをのこにはまさりてきこえ」（『大鏡』道隆

馬内侍 (五)

——その育まれた文芸的環境を中心に——

福井迪子

前稿（「馬内侍四」本校紀要二九号）では、花山院にかかわる説話、ならびに『尊卑分脈』にいう「東三条女房」をめぐるもの、詮子女院への出仕の可能性について検討してみた。小稿では『中古歌仙三十六人伝』に言う「一条院皇后女房」時代について見、また歌人としての評価にかかわる説話などについてふれてみたい。

一

「右馬権頭源時明女。一条院皇后女房。立后之時為ニ本宮掌侍^一。」

と、「中古歌仙三十六人伝」は馬内侍の略伝を伝えている。ここにいう「一条院皇后」が、「藤原定子」を指していることは、次の資料等から確かめることができ大方の理解をえている。すなわち、『如意宝集』恋下の断簡¹には、次のごとく

中宮内侍むま

こよひきみ いかな るさとのつきをみて

みやこにたれを おも ひいづらむ

と、家集一五五番の歌があり、「中宮内侍むま」との作者名が表記されている。『如意宝集』の成立は、久曾神昇氏の研究により、『拾遺抄』よりも早く、「長徳二年乃至同年十二月の間²」のことと推定されている。また、堀部正二氏によって「長徳三、四年、遅くとも長保元年十二月の頃には既に完成して世に流布するに至つてゐた³」と推定された『拾遺抄』にも同歌は「中宮内侍^馬」として入集している。両集共に藤原公任撰と考えうるならば、公任卿は馬内侍と交遊関係にあつたことから、その名の表記の信憑度は高いと考える。

定子の経歴は、『日本紀略』によれば次のごとくである。

正暦元年正月廿五日壬寅 内大臣藤原朝臣女定子入ニ掖庭^一。

同年 二月十一日 以ニ藤原定子^一為ニ女御^一。

同年 十月五日丁未 改ニ中宮^一為ニ皇后^一。以ニ女御從四位下藤

原定子^一冊為ニ中宮^一。即任ニ宮司^一。

さて、「中古歌仙三十六人伝」に言う「立后」は、正暦元年十月五日の中宮冊立の時点を示すものであろう。これ以後、長保元年十一月一日に藤原彰子が十二才で入内し、同六日女御となり、同二年二月廿五日立后⁴に至るまで、定子は中宮と呼ばれ、それ以後皇后宮と呼ばれることとなった。

こうした史実から見れば、彰子の立后は『如意宝集』や『拾遺抄』の成立以後の事である。従つて、彰子も立后以後は中宮と呼ばれはしたが、『如意宝集』及び『拾遺抄』に記された「中宮内侍むま」の「中宮」は、「定